

列王記第一21-22章「悪に魂を売った王」

1A ナボテ殺し 21

1B 義人の流血 1-16

1C ふてくされ 1-4

2C 妻の唆し 5-16

2B 滅びの定め 17-29

2A ラモテ・ギルアデ戦争 22

1B アハブへの裁き 1-40

1C 出来過ぎた預言 1-12

2C 感わしの霊 13-28

3C 抗えない御心 29-40

2B 王たちへの戒め 41-53

1C 協力したユダ王 41-50

2C 悔い改めない子 51-53

本文

列王記第一 21 章を開いてください。私たちは、アハブの生涯の終わりを今日読みます。少しおさらいをしたいと思います。北イスラエルは、初めから霊的にポタンを掛け間違った歴史を辿りました。ヤロブアムが金の子牛をイスラエル人に拝むようにさせました。そしてヤロブアム家はことごとく滅ぼされ、その後のバシャ家も同じ罪で滅ぼされました。ところが、その後に出て来たオムリ家は、これまでの罪に加えてさらに大きな悪を行ないました。オムリの息子アハブが、シドン王の娘イゼベルと結婚したため、バアル信仰を大体的に導入させました。

そこで、神が預言者を遣わされる活動を盛んに行われます。その代表的人物がエリヤです。神から離れて、真っ向から滅びへの道を進んでいるイスラエルに対して、衝突するかのようにそのまま主の言葉を伝えたのが、エリヤです。そして、三年間の飢饉を起し、さらにバアル預言者との対決において、ヤハウエが生きておられることを示しました。

ところが、アハブが悔い改める気配はありませんでした。それでも、神はアハブが悔い改めるのを忍耐して、預言者を遣し続けられます。私たちが前回学んだ 20 章では、アラム(現代のシリア)との戦いにおいて、主がイスラエルに圧倒的な勝利を与えてくださる約束を与えてくださり、その通りになったにも関わらず、アラムの王ベン・ハダデ二世と契約を結ぶという愚行を行なったのです。そして、彼自身とイスラエルの民が代わりに死ぬという預言を受けました。アハブの特徴は、甘えの精神構造です。自分が否定される言葉が与えられると、不機嫌になり、激しく怒りました。箴言

には、叱責を受けることこそがいのちへの道だと教えられていますが(例:6:23)、アハブは叱責こそ最も忌み嫌っていました。

1A ナボテ殺し 21

1B 義人の流血 1-16

1C ふてくされ 1-4

21:1 このことがあって後のこと。イスラエル人ナボテはイスラエルにぶどう畑を持っていた。それはサマリヤの王アハブの宮殿のそばにあった。

「このこと」とは、アラムとの戦いがあって後ということです。北イスラエルの首都はサマリヤですが、宮殿をイスラエル平原の南に位置する町、イスラエルにアハブは建てていました。そこに、ナボテがぶどう畑を持っていました。

21:2 アハブはナボテに次のように言って頼んだ。「あなたのぶどう畑を私に譲ってほしい。あれは私の家のすぐ隣にあるので、私の野菜畑にしたいのだが。その代わりに、あれよりもっと良いぶどう畑をあげよう。もしあなたがそれでよいと思うなら、それ相当の代価を銀で支払おう。」21:3 ナボテはアハブに言った。「主によって、私には、ありえないことです。私の先祖のゆずりの地をあなたに与えるとは。」

午前礼拝で話しましたように、神はイスラエルに対して、約束の地を与えておられました。その土地をどんなことがあっても決して失ってはならないという神の命令があります。これは、アダムに対して地を支配させるという神の祝福の延長であり、神はアブラハムの子孫によって、ご自分の御心を実現しようとされていたのです。このことを一途に守っていたのがナボテです。預言者エリヤに対してかつて、北イスラエルにも残された民が七千人いると主は教えられましたが、ナボテは、相手がたとえ王であっても、神に背くことをしなかった残された民でした。

21:4 アハブは不きげんになり、激しく怒りながら、自分の家にはいった。イスラエル人ナボテが彼に、「私の先祖のゆずりの地をあなたに譲れません。」と言ったからである。彼は寝台に横になり、顔をそむけて食事しようとはしなかった。

これを日本語で何と言いますか？「ふてくされる」と言いますね。アハブの幼児性、肥大化した自我がここにあります。アハブの場合は明らかですが、私たち一人一人にこうした甘え心は多かれ少なかれあるでしょう。そして、主の御心であることを知りながら、それに反発して、いつまでも自分を御心にゆだねない自分がいます。けれども、自分が反抗していることさえも自分のプライドから認めることを拒んで、それで黙りこくったり、陰口を言ったり、人から離れて引きこもったり、わがままな行動に移ります。

けれども、もしその我がままをそのまま実行できたとしたらどうなるでしょうか？その我が儘がそのまま、人殺し、流血の罪に至るということまでは想像していません。けれども、実はそうなのです。アニメ「ドラえもん」の話を思い出しますが、自分の言うことが全てかなえられる道具があって、のび太は何か友達からちょっと嫌なことを言われる、親からも厳しいことを言われる、それで、「すべての人がいなくなれ！」と言ったのです。そうしたら、すべてなくなりました。彼は自由自在に一日、二日過ごしていましたが、食べ物は腐ってくるし、たった独りで孤独になるし、どうしようもなくなりました。イゼベルは、アハブの我がままをそのまま実行させました。それは、ナボテを抹消することです。

2C 妻の唆し 5-16

21:5 彼の妻イゼベルは彼のもとにはいつて来て言った。「あなたは どうしてそんなに不きげんで、食事もなさらないのですか。」21:6 そこで、アハブは彼女に言った。「私がイズレエル人ナボテに『金を払うからあなたのぶどう畑を譲ってほしい。それとも、あなたが望むなら、その代わりのぶどう畑をやってもよい。』と言ったのに、彼は『私のぶどう畑はあなたに譲れません。』と答えたからだ。」21:7 妻イゼベルは彼に言った。「今、あなたはイスラエルの王権をとっているのでしょう。さあ、起きて食事をし、元気を出してください。この私がイズレエル人ナボテのぶどう畑をあなたのために手に入れてあげましょう。」

なんと言ったら良いか、もし彼女が良いことのために動いているのなら、実に頼もしい奥さんなのですが、神に対する恐れ、良心のひとかけらもない恐ろしい悪女です。

21:8 彼女はアハブの名で手紙を書き、彼の印で封印し、ナボテの町に住む長老たちとおもだった人々にその手紙を送った。21:9 手紙にはこう書いていた。「断食を布告し、ナボテを民の前に引き出してすわらせ、21:10 彼の前にふたりのよこしまな者をすわらせ、彼らに『おまえは神と王をのろった。』と言って証言させなさい。そして、彼を外に引き出し、石打ちにして殺しなさい。」21:11 そこで、その町の人々、つまり、その町に住んでいる長老たちとおもだった人々は、イゼベルが彼らに言いつけたとおりに、彼女が手紙に書き送ったとおりに行なった。21:12 彼らは断食を布告し、ナボテを民の前に引き出してすわらせた。21:13 そこに、ふたりのよこしまな者がはいつて来て、彼の前にすわった。よこしまな者たちは民の前で、ナボテが神と王をのろった、と言って証言した。そこで人々は彼を町の外に引き出し、石打ちにして殺した。

神を呪うこと、上に立つ者を呪うことは、律法ではいけないと定められています(出エジプト22:28)。そして、二人、三人の証言があって事実と認められるという定めが申命記にあります。そして石打ちは、律法で定められた死刑執行の手段です。イゼベルは、イスラエルの律法を熟知しつつこの悪を行ないました。表向きは合法を装って、行いました。もし私たちが敬虔を装って、悪を行なうのであれば、それはイゼベルと同じです。事実、終わりの日はそういう時代になるとパウロは警告しています。「見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こうい

う人々を避けなさい。(2テモテ 3:5)」

21:14 こうして、彼らはイゼベルに、「ナボテは石打ちにされて殺された。」と言ってよこした。
21:15 イゼベルはナボテが石打ちにされて殺されたことを聞くとすぐ、アハブに言った。「起きて、
イスラエル人ナボテが、あなたに売ることを拒んだあのぶどう畑を取り上げなさい。もうナボテは
生きていません。死んだのです。」21:16 アハブはナボテが死んだと聞いてすぐ、立って、イスラ
エル人ナボテのぶどう畑を取り上げようと下って行った。

これが、午前礼拝で学んだ唆しです。アハブは、ナボテが言っていることは正しいことを知って
いました。そこまでの良心はありました。しかし、イゼベルのこの行動によって、堂々とナボテの畑の
中に入りました。

2B 滅びの定め 17-29

主は、「待った！」をかけるためにエリヤを遣わされます。

21:17 そのとき、ティシュベ人エリヤに次のような主のことばがあった。21:18 「さあ、サマリヤに
いるイスラエルの王アハブに会いに下って行け。今、彼はナボテのぶどう畑を取り上げようと、そ
こに下って来ている。21:19 彼にこう言え。『主はこう仰せられる。あなたはよくも人殺しをして、取
り上げたものだ。』また、彼に言え。『主はこう仰せられる。犬どもがナボテの血をなめたその場所
で、その犬どもがまた、あなたの血をなめる。』」

神の報復です。ナボテは、イスラエルの首都サマリヤで石打ちを受け、犬どもが血をなめるとい
う卑しめを受けましたが、全く同じようにアハブが死にます。アハブは王ですから、このような死に
方は考えられませんが、必ず起こるとエリヤは預言しました。主は必ず、報いをされる方です。「神
は、ひとりひとりに、その人の行ないに従って報いをお与えになります。忍耐をもって善を行ない、
栄光と誉れと不滅のものをもとを求める者には、永遠のいのちを与え、党派心を持ち、真理に従わな
いで不義に従う者には、怒りと憤りを下されるのです。(ローマ 2:6-8)」

21:20 アハブがエリヤに、「あなたはまた、私を見つけたのか。わが敵よ。」と言うと、エリヤは答
えた。「あなたが裏切って主の目の前に悪を行なったので、私は見つけたのだ。」

甘えの多いアハブにとって、対決型のエリヤは本当に嫌いでした。飢饉が三年続いた後に、ア
ハブがエリヤに会った時に、「これはおまえか。イスラエルを煩わすもの。(18:17)」と言いました。
エリヤは、「あなたとあなたの父の家こそ、イスラエルを煩わせている。」と答えましたが、まさにそ
うでした。人を裁く人は、実は自分自身がそれを行なっていて、相手を責めて転嫁させていること
が多いのです。例えば、「その人は愛がない」と言いながら自分こそが愛がない、「この人は人を
裁く」と言いながら、自分こそが裁いています。

21:21 今、わたしはあなたにわざわいをもたらす。わたしはあなたの子孫を除き去り、アハブに属する小わっぱも奴隷も、自由の者も、イスラエルで絶ち滅ぼし、21:22 あなたの家をネバテの子ヤロブアムの家のようにし、アヒヤの子バシャの家のようにする。それは、あなたがわたしの怒りを引き起こしたその怒りのため、イスラエルに罪を犯させたためだ。

これでイスラエルは、三つの王朝に同じ裁きが下されました。ヤロブアムの家は、バシャによってことごとく滅ぼされました。そしてバシャの家はジムリによってことごとく滅ぼされました。そして、アハブの家が同じ定めの中に入りました。

21:23 また、イゼベルについても主はこう仰せられる。『犬がイズレエルの領地でイゼベルを食らう。』21:24 アハブに属する者で、町で死ぬ者は犬どもがこれを食らい、野で死ぬ者は空の鳥がこれを食らう。』

イゼベルについても、裁きの宣言が下されます。後にイスラエルの将軍エフーが、彼女を殺します。アハブの場合は、その血を犬が舐めるということでしたが、イゼベルの場合は、犬が彼女を食らう、というもっと凄惨な形で死ぬことになります。

興味深いことに、イゼベルがナボテ殺人の陰謀の張本人ですが、あくまでも滅ぼされる宣言を受けたのはアハブであり、イゼベルは付加的に裁かれるだけです。これだけ主は、権威者、指導者に対して、または男に対して責任を負わせていることが分かります。エバがアダムに木の実を食べるよう渡したのですが、罪が世界に入ったのは、アダムが木の実を食べたことによってであり、罪からの救いについては、男も女も同じです。女も、ただ神に対してだけ責任を持っている、神のおきてに対して罪を犯します。けれども、秩序としては男が頭です。男はリーダーとして、絶えず神から命じられたことに応じているか試されています。

21:25 アハブのように、裏切って主の目の前に悪を行なった者はだれもいなかった。彼の妻イゼベルが彼をそそのかしたからである。21:26 彼は偶像につき従い、主がイスラエル人の前から追い払われたエモリ人がしたとおりのことをして、忌みきらうべきことを大いに行なった。

午前礼拝で、この箇所を詳しく説明しました。自分のしたいことをもし、自由奔放に行ったとしたらどうなるか？神の言われていることを窮屈に感じて、それから自由にされようとするならどうなるか？自分が求めていた自由とは裏腹に、自分の魂を罪に対して、悪に対して売り渡し、その罪の虜になるのだ、ということです。そして、罪を行なうように唆す存在が私たちの周りには数多くあるのだ、ということです。

そして列王記の著者は、かつて主がイスラエル人の前から追い払われたエモリ人のことを取り

上げています。これは、同じことを行なっていたら、イスラエルもこの土地から追い散らされるという含みがあります。

21:27 アハブは、これらのことばを聞くとすぐ、自分の外套を裂き、身に荒布をまとい、断食をし、荒布を着て伏し、また、打ちしおれて歩いた。21:28 そのとき、ティシュベ人エリヤに次のような主のことばがあった。21:29 「あなたはアハブがわたしの前にへりくだっているのを見たか。彼がわたしの前にへりくだっているの、彼の生きている間は、わざわざを下さない。しかし、彼の子の時代に、彼の家にわざわざを下す。」

とてつもない神の憐れみです。神はイスラエルに対して、いかにこれを滅ぼしたくないか、その憐れみを列王記の中で眺めることができます。アハブがへりくだっているその姿が少し見えただけで、アハブが生きている間にその家を滅ぼすということを行わない、と神はお決めになりました。「(主は)あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。(2ペテロ 3:9)」

アハブのへりくだりは、どのようなものだったのでしょうか。それは甘えからの脱却です。エリヤが語った神の裁きの言葉に対して、それは正しいと認めたという行動です。主が行われていることを、確かにそうであると認めること、それが自分にとって不利なことであっても、やはり主が行われているのだからと認めること、これがへりくだりです。ダビデが、どんなに悪いことが起こっても、それは主から来ているのだと神の主権を認めましたが、それが聖書の定義するへりくだりです。「私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。それゆえ、あなたが宣告されるとき、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます。(詩篇 51:4)」そして主は、へりくだる者には豊かな憐れみを施してくださいます。

2A ラモテ・ギルアデ戦争 22

1B アハブへの裁き 1-40

1C 出来過ぎた預言 1-12

22:1 アラムとイスラエルとの間には戦いがいまま三年が過ぎた。

話は20章の続きです。ベン・ハダデ二世がサマリヤを包囲し、それに対してイスラエルは少数でアラム軍を打破しましたが、生き残ったベン・ハダデをアハブは生かしただけでなく、盟約を結ぶことまでしました。そして、その後、戦争のない状態が三年続きました。

22:2 しかし、三年目になって、ユダの王ヨシャパテがイスラエルの王のところの下って来ると、22:3 イスラエルの王は自分の家来たちに言った。「あなたがたは、ラモテ・ギルアデが私たちのものであることを知っているではないか。それなのに、私たちはためらっていて、それをアラムの王の手から奪い返していない。」22:4 それから、彼はヨシャパテに言った。「私といっしょにラモテ・ギ

ルアデに戦いに行ってくださいませんか。」ヨシャパテはイスラエルの王に言った。「私とあなたとは同じようなもの、私の民とあなたの民、私の馬とあなたの馬も同じようなものです。」

ラモテ・ギルアデは、ガド部族の町の一つでした(申命記 4:43、1列王記 4:13)。それでそれを取り返そうとアハブは言います。ベン・ハダデが町々をイスラエルに返還した時に、この町は含まれていなかったようです。この町の戦略的重要性をアハブは考えているのでしょう。

ところでユダの王はアサからヨシャパテになっていました。かつてアサとイスラエルの王バシャが国境線を巡って戦ったことを思い出してください。その後、北イスラエルと南ユダは戦うことを止めました。そして南北の協調時代がやってきます。ヨシャパテがアハブと仲良くしたからです。歴代誌第二でヨシャパテの業績を読めば、彼がいかに霊的な人間であるか分かるのですが、彼と極悪王アハブが仲良くしているというのは実に不思議な光景です。ヨシャパテの子ヨラムがアハブの娘をめとります(2列王 8:18)。そこまで関わりが深くなって、ついにイスラエルの王だけでなく共にユダの王もそのバアル信仰のために殺されることとなります。協調は政治的には良いことですが、イスラエルは人間の国ではなく、神に召された国なのです。私たちキリスト者も人間的な平和ではなく、神のもたらす平和を求めなければいけません。

22:5 ヨシャパテは、イスラエルの王に言った。「まず、主のことばを伺ってみてください。」

ヨシャパテは霊的な人ですから、アハブの言葉を聞いて同調はしているものの、主が語られていることを求めました。何かをする時に、立ち止まって祈り、主の御心を求めるのです。主のことばを見て、果たして御心にかなっているかどうか調べます。

22:6 そこで、イスラエルの王は約四百人の預言者を召集めて、彼らに尋ねた。「私はラモテ・ギルアデに戦いに行くべきだろうか。それとも、やめるべきだろうか。」彼らは答えた。「上って行きなさい。そうすれば、主は王の手にこれを渡されます。」22:7 ところが、ヨシャパテは、「ここには、私たちがみこころを求めることのできる主の預言者がほかにいないのですか。」と言った。

ヨシャパテは、この約四百人の預言者が主の御心を求める者たちでないことを感じていました。アハブはさすがバアルの祭司は連れてきませんでした。「ヤハウエ」の名によって預言しています。けれども、本物の預言者のようではないようです。皆がこぞって同じ預言をしていること、そして王の意向をそのまま後押ししている預言しかしていないことに、違うだろうと思ったのです。

主の言葉が人の意向を後押しするだけのものであれば、その言葉は主からのものだと言っても偽物です。「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。(2テモテ 3:16)」教えがありますが、それは戒めになります。私たちがしていることは間違っていることを教えるものです。そして矯正、つまりその間違っている道を正します。そして義の訓練、

正した後を保つべく訓練を受けます。これが預言の性質なのです。

22:8 イスラエルの王はヨシャパテに答えた。「いや、ほかにもうひとり、私たちが主のみこころを求めることのできる者がいます。しかし、私は彼を憎んでいます。彼は私について良いことは預言せず、悪いことばかりを預言するからです。それは、イムラの子ミカヤです。」すると、ヨシャパテは言った。「王よ。そういうふうには言わないでください。」22:9 そこで、イスラエルの王はひとりの宦官を呼び寄せ、「急いで、イムラの子ミカヤを呼んで来なさい。」と命じた。

アハブのへりくだりは、一時的でした。また、甘えの中に生きています。自分に気に入らないことを聞くのを非常に嫌っています。けれども、ヨシャパテが制することによって、ミカヤが連れて来られます。

22:10 イスラエルの王と、ユダの王ヨシャパテは、おのおの王服を着て、サマリヤの門の入口にある打ち場の王の座に着き、預言者はみな、ふたりの前で預言していた。22:11 そのとき、ケナアナの子ゼデキヤは、王のために鉄の角を作って言った。「主はこう仰せられます。『これらの角で、あなたはアラムを突いて、絶滅させなければならない。』」22:12 ほかの預言者たちもみな、同じように預言して言った。「ラモテ・ギルアデに攻め上って勝利を得なさい。主は王の手にこれを渡されます。」

門において、町の中の行政的な事柄が行われていました。そこに打ち場があったということですが、その平たいところに大勢の預言者が集まっていました。そして、いかにもお芝居、作り上げたというような預言をゼデキヤが行っています。鉄の角まで作っています。これは、まさに主が再臨される前の人々の姿であります。「というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。(2テモテ 4:3-4)」

2C 感わしの霊 13-28

22:13 さて、ミカヤを呼びに行った使いの者はミカヤに告げて言った。「いいですか。お願いします。預言者たちは口をそろえて、王に対し良いことを述べています。お願いしますから、あなたもみなと全く同じように語り、良いことを述べてください。」22:14 すると、ミカヤは答えた。「主は生きておられる。主が私に告げられることを、そのまま述べよう。」

これは、預言者として死んだも同様です。二つの問題があります。一つは、王に対して良いことを述べなさい、ということです。これは、先に話しましたように神の言葉の性質から離れています。もし、教会で自分に聞いてほしいことを牧者や説教者に願って、その願いを話してくれる人がいたら、どうかその教会を離れてください。それはもはや神の言葉ではなく、へつらいの言葉という人

間の言葉であります。もう一つの問題は、「みなが全く同じように語っているから」ということです。みなが語っていることが正しいのだという圧力です。聖書を読めば、全くその反対のことが起こっています。神に用いられている人はいつも少数派です。真理は、大勢に受け入れられないのです。イエス様は、「狭い門から入りなさい」と言われました。世はこの方を受け入れません。けれども、神によって召された者たちがその言葉を受け入れるのです。人々が神に従うのは、一方的に神の働きであることが明らかにされるためです。

22:15 彼が王のもとに着くと、王は彼に言った。「ミカヤ。私たちはラモテ・ギルアデに戦いに行くべきだろうか。それとも、やめるべきだろうか。」すると、彼は王に答えた。「攻め上って勝利を得なさい。主は王の手にこれを渡されます。」22:16 すると、王は彼に言った。「いったい、私が何度あなたに誓わせたら、あなたは主の名によって真実だけを私に告げるようになるのか。」

ミカヤは皮肉たっぷりに、このことを言ったのでしょう。それでアハブは、本気で預言していないことを見てとって、彼をたしなめました。

22:17 彼は答えた。「私は全イスラエルが、山々に散らされているのを見た。まるで、飼い主のいない羊の群れのように。そのとき、主は仰せられた。『彼らには主人がいない。彼らをおのおのその家に無事に帰さなければならぬ。』」22:18 イスラエルの王はヨシャパテに言った。「彼は私について良いことを預言せず、悪いことばかりを預言すると、あなたに言うておいたではありませんか。」

飼い主、つまりアハブがいなくなって、それでイスラエルが散り散りになって、自分たちの家に戻ります。そしてミカヤは、この真実な預言を行なっただけでなく、この預言の舞台裏の幻まで伝えます。

22:19 すると、ミカヤは言った。「それゆえ主のことばを聞きなさい。私は主が御座にすわり、天の万軍がその右左に立っているのを見ました。22:20 そのとき、主は仰せられました。『だれか、アハブを惑わして、攻め上らせ、ラモテ・ギルアデで倒れさせる者はいないか。』すると、あれこれと答えがありました。22:21 それからひとりの霊が進み出て、主の前に立ち、『この私が彼を惑わします。』と言いますと、主が彼に『どういうふうにするのか。』と尋ねられました。22:22 彼は答えました。『私が出て行き、彼のすべての預言者の口で偽りを言う霊となります。』すると、『あなたはきっと惑わすことができよう。出て行って、そのとおりにせよ。』と仰せられました。22:23 今、ご覧のとおり、主はここにいるあなたのすべての預言者の口に偽りを言う霊を授けられました。主はあなたに下るわざわいを告げられたのです。」

この幻は、極めて重要な真理を伝えています。まず、神は惑わしの霊、悪霊どもをご自分の僕として用いることができる、ということです。もちろん悪霊、その頭である悪魔は神に反逆する霊です。

しかし、神の許しがなければ決して彼らは自分たちの行動をすることができません。ヨブ記を思い出してください。ヨブについて、サタンが神にこう訴えています。「あなたは彼と、その家とそのすべての持ち物との回りに、垣を巡らしたではありませんか。(1:10)」それで、神はその垣を取り上げられて、サタンがヨブの持ち物や子供たちに手を出すことができるようになったのです。

そして神は積極的に、ご自分の裁きのために惑わしの霊を使うことができます。アハブが滅ぼすために、偽りを信じさせ、そしてその偽りに従って生きることで死なせるという裁きです。これを神は、終わりの日に、反キリストの偽りによって世界に裁きを行なわれます。「不法の人の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行なわれます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。それゆえ神は、彼らが偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます。それは、真理を信じないで、悪を喜んでいたすべての者が、さばかれるためです。(2テサロニケ 2:9-12)」

22:24 すると、ケナアナの子ゼデキヤが近寄って来て、ミカヤの頬をなぐりつけて言った。「どのようにして、主の霊が私を離れて行き、おまえに語ったというのか。」22:25 ミカヤは答えた。「いまに、あなたが奥の間にはいつて身を隠すときに、思い知るであろう。」

まさか自分に偽りの霊が入ったなどと認めたくなかったでしょう。けれども偽預言というものの、偽の霊というのは、自分の肉の願いをそのまま主の名によって語るものには入ってきます。主がユダヤ人たちに対して、「あなたがたの父は悪魔であり、悪魔は初めから偽り者である」ということを言われたことがあります。それは彼らがイエスに殺意を抱いていたのに、自分たちこそがアブラハムの約束を受け継ぐ者たちであると偽っていたからです。

そして「奥の間にはいつて身を隠すとき」というのは、殺されることが分かっているので必死に逃げている姿です。かつてベン・ハダデ二世がイスラエルに敗れた時に、奥の間に逃げました。偽預言者に対しては、神は死刑を命じておられます(申命 18:20-22)。

22:26 すると、イスラエルの王は言った。「ミカヤを連れて行け。町のつかさアモンと王の子ヨアシユのもとに下がらせよ。22:27 王が『この男を獄屋に入れ、私が無事に帰って来るまで、わずかなパンと、わずかな水をあてがっておけ。』と命じたと言え。」22:28 ミカヤは言った。「万が一、あなたが無事に戻って来られることがあるなら、主は私によって語られなかったのです。」そして、「みなの人々よ。聞いておきなさい。」と言った。

偽物かどうかを知るには、その言葉がその通りになるのかどうかによって計られます。神のことばは、絶対にその通りになります。成就せずに虚しく戻って来ることは決してありません。

ところで、預言というのは占いのようなものではありません。その言葉が当たるかどうか、という賭け事のようなものではありません。預言とは神の聖なる言葉です。神の正義と一貫した言葉です。真実という神のご性質にかなう言葉です。したがって、私たちが神の御言葉を、神の正義と聖さ、真実に照らし合わせて信仰をもって語る時に、その言葉は預言的なものとなります。

かつて日本が戦争の道を歩んでいる時に、日本は朝鮮を併合していました。そして、朝鮮半島にまで行き、神社参拝をキリスト者に対しても行なわせました。ある朝鮮人の教会の長老がなんと東京の国会議事堂で、傍聴席から紙をばらまきました。そこには日本が火の海になるという内容を書いたものでした。事実、日本は米軍によって空襲、そして原爆投下の被害を受けました。彼は、恍惚状態になってこのことを話したのではないでしょう。聖書を読み、偶像崇拝を強要する、殊に神の民にこれを強要する者には、格別な裁きを与えられる数多くの箇所を読んでいたのです、その正義に照らし合わせて、信仰によって語ったのだと思われます。

3C 抗えない御心 29-40

22:29 こうして、イスラエルの王とユダの王ヨシャパテは、ラモテ・ギルアデに攻め上った。22:30 そのとき、イスラエルの王はヨシャパテに言った。「私は変装して戦いに行こう。でも、あなたは、自分の王服を着ていてください。」こうして、イスラエルの王は変装して戦いに行った。

ミカヤによる預言があったのにも関わらず、アハブは無視、そしてヨシャパテもアハブに唆されて戦いに参与します。しかし、アハブはこの預言を完全には無視できないようです。そしてなんと、ヨシャパテが自分に変わって死ぬように仕向けています。しかし、ここで知らなければいけないのは、神の御心は決して抗えないということです。自分がいくら、御心に対抗してそれが実現するのを妨げようとしても、必ずその言葉は自分の身に降りかかります。

22:31 アラムの王は、自分の配下の戦車隊長たち三十二人に命じて言った。「兵や将校とは戦うな。ただイスラエルの王を目ざして戦え。」

ベン・ハダデ二世は、個人的な怨讐がアハブにあったかもしれませんが。なぜなら、平和の契約を結んだはずなのに、それをアハブが裏切ったからです。あるいは純粹に、戦いの早期終結を図るため王だけの焦点を合わせているのかもしれません。

22:32 戦車隊長たちはヨシャパテを見つけたとき、「確かにあれはイスラエルの王に違いない。」と思ったので、彼のほうに向かって行って戦おうとした。すると、ヨシャパテは助けを叫び求めた。22:33 それで、戦車隊長たちは、彼がイスラエルの王ではないことを知ったとき、彼を追うことをやめ、引き返した。

歴代誌第二を読みますと、ヨシャパテは主に叫び求めたことが分かります(18:31)。そして主が

彼を助けられました。

22:34 ところが、ひとりの兵士が何げなく弓を放つと、イスラエルの王の胸当てと草摺の間を射抜いた。そこで、王は自分の戦車の御者に言った。「手綱を返して、私を敵陣から抜け出させてくれ。傷を負ってしまった。」

神が、この何気ないという行動をさえご自分の詳細な計画の中に組み込まれていました。神によって、どんなこともご自分の主権から漏れることはありません。「すべてのものの上であり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる。すべてのものの父なる神は一つです。(エペソ 4:6)」

22:35 その日、戦いはますます激しくなった。王はアラムに向かって、戦車の中に立っていたが、夕方になって死んだ。傷から出た血は戦車のくぼみに流れた。22:36 日没のころ、陣営の中に、「めいめい自分の町、自分の国へ帰れ。」という叫び声が伝わった。22:37 王は死んでからサマリヤに着いた。人々はサマリヤで王を葬った。

アハブ王は、最後の力をふりしぼって戦車の中に立っていました。それで夕方まで戦いが続けていましたが、その死が知らされたので、イスラエルは撤退しました。

22:38 それから、戦車をサマリヤの池で洗った。すると、犬が彼の血をなめ、遊女たちがそこで身を洗った。主が語られたことばのとおりであった。

先ほど読んだ18章19節のエリヤの言葉、「犬どもがナボテの血をなめたその場所で、その犬どもがまた、あなたの血をなめる。」という言葉が実現しました。犬に加えて、遊女もここに現れています。アハブの死の屈辱的な姿、神の裁きの厳しさが浮き出しています。

22:39 アハブのその他の業績、彼の行なったすべての事、彼が建てた象牙の家、彼が建てたすべての町々、それはイスラエルの王たちの年代記の書にしるされているではないか。22:40 アハブは彼の先祖たちとともに眠り、その子アハズヤが代わって王となった。

サマリヤの遺跡の発掘において、象牙が出てきています。以前もお話ししましたように、イスラエルの王国時代の遺跡としては、ソロモンによるもの、そしてアハブによるものがその多くを占めています。アハブは、国を物質的には良くしたということで優れた王でしたが、霊的には極悪でした。私たちは、神の正義と物質的な豊かさ、快適さ、安定とどちらを取るのか、その選択が与えられています。

2B 王たちへの戒め 41-53

1C 協力したユダ王 41-50

そしてアハブに協調したヨシャパテの業績が次に書かれています。

22:41 アサの子ヨシャパテがユダの王となったのは、イスラエルの王アハブの第四年であった。
22:42 ヨシャパテは三十五歳で王となり、エルサレムで二十五年間、王であった。その母の名はアズバといい、シルヒの娘であった。22:43 彼はその父アサのすべての道に歩み、その道からそれることなく、主の目にかなうことを行なった。しかし、高き所は取り除かなかった。民はなおも、その高き所でいけにえをささげたり、香をたいたりしていた。

父アサ王は主に従いましたが、高き所は取り除かなかったということを読みました。その子ヨシャパテもそうでした。歴代誌第二 17 章 6 節には高き所を除いたとありますが、おそらくその後に民がまた高き所を建ててしまったのでしょうか。完全な宗教改革は、ヒゼキヤ、そしてヨシヤの時に行われます。

22:44 ヨシャパテはイスラエルの王と友好関係を保っていた。

ヨシャパテは、このことについて歴代誌第二において、預言者から叱責を受けています。「悪者を助けるべきでしょうか。あなたは主を憎む者たちを愛してよいのでしょうか。(19:2)」パウロは、「不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。(2コリント 6:14)」と言いました。私たちは、不信者の方々と付き合いをやめるべきではありません。けれども、不信者との価値観の共有は止めるべきです。自分が不信者との付き合いをしている中で、自分がキリストを分かち合うという動機以外の何かがある時、実は自分自身にこの世を持ち込んでいます。そして、パウロがその手紙を書いたコリントでは、不信者の人たちへの過度な同情、関わりのために、パウロに対する愛が冷えていました。この世との交わりがあれば、信者との愛の交わりができなくなるのです。この二つは混じり合わせることはできません。

22:45 ヨシャパテのその他の業績、彼の立てた功績とその戦績、それはユダの王たちの年代記の書にしるされているではないか。22:46 彼は、父アサの時代にまだ残っていた神殿男娼をこの国から除き去った。

ヨシャパテは、父アサの宗教改革をさらに徹底させました。けれども、またもやアハブ家との交わりという過ちを犯します。

22:47 そのころ、エドムには王がなく、守護が王であった。22:48 ヨシャパテはタルシシュの船団をつくり、金を得るためにオフィルへ行こうとしたが、行けなかった。船団がエツヨン・ゲベルで難破したからである。22:49 そのとき、アハブの子アハズヤはヨシャパテに、「私の家来をあなたの家来といっしょに船で行かせましょう。」と言ったが、ヨシャパテは承知しなかった。22:50 ヨシャパテ

は彼の先祖たちとともに眠り、先祖たちとともに父ダビデの町に葬られた。その子ヨラムが代わって王となった。

エドムに王がなかった、つまり、その地域を自由に行き来できました。したがって、紅海のアカバ湾まで行くことができました。エツヨン・ゲベルは今のヨルダンのアカバ辺りにありました。ちなみにエラテは、今のイスラエルのエイラットあたりにあったと考えられます。そこはイスラエルにとって地中海以外の貴重な海であり、そこから世界への貿易を展開させることができました。オフィルはおそらく今のアラビア半島の南西にあったと考えられています。「タルシシュの船団」とありますが、タルシシュは今のスペインにあります。けれども、アフリカ大陸の周囲を航行してスペインに行ったのではなく、タルシシュ式の遠洋船団という意味でしょう。

歴代誌第二 20 章によると、預言者がここに現れて、アハズヤと同盟を結んだので、航行を始める前に難破するという預言を行い、果たしてその通りになりました(37 節)。その後で、アハズの子アハズヤが「今度は私たちの家来もいっしょに行かせてください」と行ってきたのですが、ヨシャパテは懲りてそれを行なわせませんでした。

2C 悔い改めない子 51-53

22:51 アハブの子アハズヤは、ユダの王ヨシャパテの第十七年にサマリヤでイスラエルの王となり、二年間、イスラエルの王であった。22:52 彼は主の目の前に悪を行ない、彼の父の道と彼の母の道、それに、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの道に歩んだ。22:53 すなわち、彼はバアルに仕え、それを拝み、彼の父が行なったと全く同じように行なって、イスラエルの神、主の怒りを引き起こした。

エリヤはアハブについて、主から彼の子において裁きが実現することを語られていました。その子アハズヤがいます。彼の治世がたった二年で終わっていますが、それは列王記第二の始めに理由が書かれています。彼は主の裁きを受けました。その兄弟ヨラムがその後統治しますが、彼もエフーによって殺され、アハブ家が完全に滅ぼされます。

これだけ悪に染まったイスラエルでさえ、アハブでさえ、神がエリヤやミカヤ等によってご自分の言葉を伝えました。少しでもへりくだりの姿を見せれば、神は憐れみをかけました。それを逆手によって、悔い改めない態度を取るのであれば、神はそれをそのままにされないという警告がありません。